二十八話　まのというそつき男

むかしむかし、小豆沢のだんな様のうちにまのという刈子がいど。そのまので人はたいしたからっぽやみであったど。

だんなさんが

「まの、まの、きょうなんぼとってきてえ」

としえると、まのは、

「きょうも三駄」

としえっていたど。一駄というのは六把のことだえ。まのはほんとはなんにもとねえで、昼寝ばっかししていだど。だんなさんもそろそろ、えっぺ取ったころだと思って、

「まの、えっぺ、たまったべ。そろそろ家さもってこいじゃ」

としえったど。さあ、困ったのはまのだおん、なんにもとってないのだおん。このまのったら悪知恵えくて、頭さうかんできたかんかえあったど。

まのはな、米っこ一つかみもって鷲の巣の大きな松の木の根っこの前さえったど。そしてな、米っこかんでは「ぷっ」とはきだして、鳥のくそみたいにしたど。してな。けっぱってはせえできたど。

「だんなさん、だんなさん、たきぎどころの話でねえ。鷲の巣の大きな松の木さし、鷲、巣っこかけて、子っこなしてらし、子っこまえてらし」

「ほんとだな、まの、へば、おれとってけら」

だんなさんも、まのがうそついていだとわからねえもんだから、ほんとだかと思って、山さ、えったど。まのがしたばにやらくやらして梯子持ってついてえったど。

松の木のそばさ、えったど、だんなさんは

「おれ、取ってくらな、うが、下にえろでえ」

としえったど。まのも調子、ええもんで、

「おれし、親くればなんねえに、追うたえに、だんなさん取ってきてくだい」

とたのんだど。だんなさん、だまされているともしらねで、どんどん登っていったど。

だんなさんが、上から、

「まの、ここらへんだなあ」

としえると、まのは、

「もっと上だし」

としえったど。

「まの、ここらへんだなあ」

「もっと、上だし」

「まの、ここらへんだなあ」

「もう、ちんと上だし」

としえってだんなさんをてっぺんさ、のぼらせてやったど。だんなさん、のぼってらうちに「でろ」と梯子とって家さ、はしえてえってしまったど。そしてしな。大きな声でおかみさんさしえったど。

「おかみさん、おかみさん、だんなさんし、木から落ちて死んでしまったし」

とじほまけてしゃべったど。

だんなさんはやっとの思いで、木からおりだど。そして、人、だますにもほどがある。たきぎ一本もとってねえでとおこったど。たらほの木でたなきもっこつくって、それさびんとしばってしまったど。ふたりの下男さ、

「米代川さ、ぶなげてこい」

といいつけだとしゃ。

ふたりの下男は橋の上まで運び、ぶんなげてけらと思っておろしたど。したばまのが、

「おれ、悪いことしたたえに投げられても、しかたがねども、おれのまくら金っこ、いたわしな」

とひとりごとしゃべったど。したば、ふたりの下男が帰ったど。するといいあんばいに湯瀬の方から、目ぐされな牛方が、牛をひいてきたど。まのはああえええどこさきた。あの牛方だましてやれと思ったど。

「目の養生、目の養生」

とさけんだど。牛方がそこさきて、

「なにして、こうしてらおんだべ」

ときいだど。まのは、

「うん、こうしてればな、なんぼ目ぐされでもなおるのだえ。こえさ、ねてるだげでな」

としゃべったど。牛方はなんとかして目くされをなおしたえに、

「へだら、おれどとまやでけろ。牛もやるたえに　どだべ」

「ふだばええ、ときゃでける」

としえってときゃだど。まのが牛方をびんとなわでしばったど。

花輪町さ、牛を売りにいったど。牛方は、

「目の養生。目の養生」

とさかんだど。

まのの寝床さはしえたふたりは、

「枕金っこおいだらなんだら、あんたらきたねえふんどしおいでまのの畜生」

とおこってはしえてきたど。して、まのだも「牛方」だもよっく見ねえで、どんぶりと川さ投げだど。目にあったのは、牛方だしな。どぶどぶと流れてえったど。

まのは牛を売ったじえんこで、着物だのみやげだのじっぱりかって、だんなさんの家さきたけど。

「だんなさん、だんなさん、おれ、川さ投げられたど。竜宮の乙姫様にかってむこになってけろとしゃべられて、どしたらえべかと思って相談っこしたいと思ってきたんし」

としゃべったど。そこのだんなさんが欲たかりなもんだか、まのみたいなものむこにさえねと思ったんだべ。

「おれもいく。まのあべじゃ。竜宮さや」

としゃべったど。ふたりは橋のところまできたど。まのが、

「おれもすぐいくども、どんぶり飛びこんでください」

としゃべったど。だんなさんが川をのぞいだとき、どやりと背中、おっつけだど。どんなさんは、

「わあっ」

とさけびながら落ちていったど。そしてまのがだんなさんの家を自分のものにしてしまったど。

どっとはらい。